予科練平和記念館だより

平成22年2月開館

予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍、町の歴史に関する資料、体験談などを収集しています。ご存じの人はぜひご一報ください

（前号の続き…日本統治下の台湾から予科練に入隊した劉連輝さんは、昭和19（1944）年11月に台湾、朝鮮半島出身者100人で構成された「特丙第1期予科練習生」として来日、空襲で破壊された土浦海軍航空隊にて終戦を迎えました。）

終戦後土浦海軍航空隊では司令以下全員が復員しましたが、台湾出身の予科練習生と彼らを指導していた教官たちはそのまま残って残務整理を続け、進駐してきたアメリカ軍に基地を引き渡しました。開隊してから約5年、「予科練揺籃の地」といわれた土浦海軍航空隊の最期を見送ったのは、台湾出身の予科練習生たちでした。

昭和20（1945）年12月、船を待って帰国した母国台湾は、それまで敵対していた中国の一部となっていました。その後の生活の中で、かつて日本兵だった劉さんたちはさまざまな面で苦しい立場にあったそうです。それについては、「あまりふれたくない過去です」とおっしゃいました。

「私たちは日本教育を受けてるから、日本人と非常に近い思想を持っている。今の私たちでもね、子どもと非常に矛盾している。僕ら面白いですよ。僕と家内の会話はね、もう60％70％日本語ですよ。そして台湾語はまぁ20％ぐらい。中国語は10％ぐらい。政治と、時代の変化と、そういうものが私たちの家庭に深く食い込んでいるわけ。非常に難しい時代ですよ、今でも。…16、17、18の時代にこういう大きな戦争、地球上における大きな出来事の中に巻き込まれた僕としてはね、やっぱり、きざみが大きいなと思うときもある。でも、僕自分の人生に対してはね、絶対に後悔しない。だから予科練生になったことをね、僕は非常に良かったと思っている。予科練生の教育、訓練はね、僕という人間を作り上げてくれた。要するに僕は予科練で、正直、真面目、絶対にうそをつかない、悪いこと絶対にしない、という精神を鍛えられている。その精神を社会生活、僕の人生にずっと生かしてきた。」

戦後、劉さんは発起人となって「高志飛会」を設立、同期生の親睦を図るとともに、予科練時代の教官やその家族を何度も台湾に招待してきました。64年間途絶えることなく交流が続いているのは、台湾人の懐深い温かさと、苦しい時代に培われた絆、そして劉さんのお人柄なのでしょう。

「…予科練の思い出で、もう一つとっても大事なことがある。鹿児島におったときです。僕たち夜になるとね、自習の時間がある。朝起きて、朝8時から12時までは大体みんな学科。幾何・代数・三角・航空術・通信学・気象学、学科ばかり4時間。だから私たち予科練に入ったときにね、兵隊に行ったという気持ちよりも、中学の延長やってるんだな、学校の延長やってるんだなという気持ちが強かった。午後は大体体操だとか運動だとかそればっかりやってました。夜自習してるときにね、こういうことが何回もありました。飛行服を着けて、顔にほとんど表情をなくした飛行兵が教室に入ってきて、みんなを見回して「先に行ってくるからな。お前ら、後を頼んだぞ」と言う。若い、まぁ十九か二十歳くらいの飛行兵。みんな大体特別攻撃隊で、特攻に行く前の日にやってくる。もう明日往くからお別れに来る。何日かしたら班長が『ここに来たやつ、もう特攻で行ってしまった』と言う。…今でも、ほんとにときたま思い出すとね、こう目頭が熱くなる。それが何度かありました。僕の予科練の思い出はこれが一番印象深い。あぁ、やがて僕なんかもそうなるんだなぁ…と。やがて僕たちも先輩のようにね、特攻機を運転してバーンとやってくるんだ、と。…感無量です。」

●

―今の若い人たちに伝えたいことは何ですか？

「戦争という行為はね、絶対に間違ってる。何かあったらお互い話し合って。短い人生持ちつ持たれつ、いたわりあって。絶対にけんかをしないで。地球というこの小さい存在を大事にして。地球ってあまりにもちっちゃい。そのちっちゃい中にある60何億の人間、お互いいたわりあって大事にして、絶対にけんかをしないように。これが私の願いです。」

長旅でお疲れにも関わらず、貴重なお話を聞かせていただいた劉さん、そして奥さま、心より御礼申し上げます。予科練平和記念館では、かつて台湾より特丙第1期予科練習生となった皆さんのことを、たくさんの人に知っていただき、永く永く伝えていきたいと思います。

▲平成20年の予科練戦没者慰霊祭にて劉連輝さんと奥さま